

高い時間分解能を持つAC-LGAD検出器の 増幅率および時間分解能の研究

202012130 堀越 一生

指導教員 廣瀬 茂輝

標準理論を超える物理現象や新粒子を発見するために、加速器実験は高輝度化と高エネルギー化を繰り返しながら発展してきた。高輝度化によって1バンチあたりの衝突数が増加すると、衝突で生成される粒子数が増える。生成された荷電粒子の飛跡を測定するために使われるシリコン製の荷電飛跡検出器は、電極サイズを小さくすることで高い位置分解能を実現する。それに加えて、検出器に高い時間分解能を持つことで粒子の飛跡に時間情報を追加することができる。それによって、高輝度化に伴うパイルアップによって困難とされる、衝突点と飛跡の結びつけが可能になる。

Low-Gain-Avalanche-Diode(LGAD) 検出器は、p型シリコン半導体をベースにしたシリコン半導体検出器で、pn接合を作るために形成された表面の n^+ 層の直下に、増幅層としてアクセプター濃度が高い p^+ 層をドーブしたAvalanche-Photo-Diode (APD) である。検出器に逆電圧をかけると、高濃度の p^+ 層によって、局所的に高電場領域を作り出すことができる。検出器内で生成された電子正孔対が、高電場による電子雪崩によって増幅されることで、立ち上がりが速くタイミングが揃った信号を出力することができ、そのため良い時間分解能で荷電粒子を検出できる。中でもAC-LGAD 検出器は、増幅層を読み出し電極ごとに分割しないで一様に形成し、酸化膜を介して電極に誘起された信号を検出する。このような構造から、隣接チャンネルへの信号のクロストークが問題であったが、不純物濃度と酸化膜の厚さを最適化することで抑制したAC-LGAD 検出器では、30 psの時間分解能が確認されている。また、AC-LGAD 検出器は増幅した信号を出力できるため、Application-Specific-Integrated-Circuit(ASIC) 内のアンプの増幅率を小さく設定することができる。そのため、ASICの消費電力の削減や発熱を抑えることが可能になる。AC-LGAD 検出器の時間分解能は、信号の大きさの違いによる閾値を超える時間のばらつきの影響(タイムウォーク σ_{tw})、回路にのるノイズによる影響(ジッター σ_j)、荷電粒子がセンサー内に落とすエネルギーの非一様性(ランダムノイズ σ_L)の3つが大きく寄与する。タイムウォークは信号に対する割合で閾値を設定する(constant fraction)を使用することで、その影響を小さくすることができる。

本研究では、AC-LGAD 検出器のASICの開発に向けて、アンプの増幅率を決定するために、最も良い時間分解能を実現する増幅率を決定することと、今後のAC-LGAD 検出器の時間分解能の向上や、高い時間分解能を可能にする電圧範囲の拡大に活かすために、時間分解能を悪化させる原因を突き止めることを目的とする。

まず最初に、AC-LGAD 検出器に対する逆電圧を変えながら増幅率と時間分解能の関係を測定し、もっとも良い時間分解能を実現する増幅率を調べるために、増幅層の無いP-Intrinsic-N (PIN) ダイオードの検出器を作成した。これらのサンプルに対し、同じ強度の赤外線パルスレーザーを入射して、信号の大きさと時間分解能を測定する。APDとPINの信号の大きさの比を取ることで、LGAD 検出器の増幅率が求まる。このような測定から、最も良い時間分解能が、 10.32 ± 0.03 psで、増幅率が 30.6 ± 3.7 倍であることがわかった。

赤外線パルスレーザーの場合は、事象ごとに信号の大きさの違いがほとんどなく、一様に電子正孔対を生成するため、タイムウォーク、ランダムノイズの影響がほとんどない時間分解能の測定をすることができる。また、ノイズを信号の微小時間あたりの波高の変化量で割ることによって、ノイズによる到達時間のばらつきであるジッターを求めることができる。そのため、ノイズ σ_n と、微小時間あたりの波高の変化量を求めるために、信号の立ち上がり時間 t_r 、信号の大きさ S の測定を行い、ジッターを求めた。測定したタイムウォークとランダムノイズの影響がほとんどない時間分解能と、計算から求めたジッターを比較することにより、時間分解能が悪化することについて調べた。比較の結果、時間分解能と計算から求めたジッターが一致しないことがわかった。

時間分解能が悪化することの原因を追求するために、時間分解能が悪化する前後の波形を比較すると、波高の揺らぎが大きくなることを確認した。この波高の揺らぎを σ_s とした。波高の揺らぎからノイズを引いた値を、微小時間あたりの波高の変化量で割ることによって、時間分解能への影響を求めた。その結果、増幅率に比例してこの影響が大きくなることがわかった。AC-LGAD 検出器の時間分解能と計算から求めたジッター、波高の揺らぎによる影響の増幅率依存性を同じグラフにプロットすることで、増幅率が大きくなると、ジッターは信号の大きさが大きくなることで小さくなるが、波高の揺らぎによる影響がジッターよりも大きくなり、それが時間分解能の悪化に寄与することがわかった。以上の結果から、AC-LGAD 検出器の時間分解能が悪化する影響する原因が、波高の揺らぎによる影響であると考えられる。また、波高の揺らぎによる影響の増幅率依存性が、先行研究より、電子雪

崩によって生成される電子正孔対による電流変化による影響（過剰ノイズ σ_m ）と類似してた。以上の結果から、AC-LGAD 検出器の時間分解能は、タイムウォーク σ_{tw} 、ジッター σ_j 、ランダウノイズ σ_L の3つに加えて、新たに過剰ノイズ σ_m も寄与することを主張する。